

古事記から学ぶ その6  
大国主神の登場 そして

大国主神が現れて、登場人物に動きが出てきた。前節の終章にこんな記述があった。  
「このあと、須佐之男はかねての望み通り、母の国を訪ねて根堅洲國(ねのかたすくに)へと赴いた」  
大国主の神(またの名を大穴牟遲神:おこなむぢのかみ)には腹違いの兄弟が80人いた(八十神:やそかみ)。兄弟はみな同じように、稲羽(いなば:現在の因幡つまり鳥取県の東部)の國の●八上比売(やかみひめ)を妻にしたいと考えていた。

### <1> 大国主神と白兔

兄弟そろって出雲國から稲羽へ向かって出かけることになったのだが、大穴牟遲に荷を背負わせて、空身で一足早く歩を進め、大穴牟遲は一人で荷を背にして後を追いかける形になった。一行が気多の岬(けたのみさき)に差し掛かった時、皮を剥がれて赤裸になった哀れな白兔が浜辺にいた。一行は「海の水で身を洗い、風が吹くところで乾かして高い山の天辺で風にあたると良い」と教えた。兔はこの助言通りにしてみたところ、肌はひび割れして耐え難い痛みで襲われた。一時置いて、荷を背負った大穴牟遲が歩いてくると、泣きわめく兔がいるので訊ねてみた。すると、「私は淤岐島(おきのしま:現在の隠岐の島)の兔です。島からここへ渡ってみたいと思ったんですが、私は泳ぎができません。海の手にお前たちサメと兔とどちらが多いか比べようと思いをかけ、一列に並んだサメの背中を数えながら歩いて、この岬まで渡ることになりました。ところが、もう少しで渡り切れるところまで来て、それ見ろ、騙してやったぞと口走ってしまいました。すると最後のサメが飛び掛かってきて、こんな風にされてしまいました。」大穴牟遲は兔が気の毒になり、こう教えてやった。「きれいな水が流れ込む河口の水で体を洗い、蒲の穂をまき散らした上を転がってみなさい」兔の体は元通りのきれいな体に戻り、大変喜んだ。そして、こう言った。「あなたの兄弟たちは八上比売を手に入れることはできないでしょう。あなたは荷物を背負って賤しい従者のような風をしているが、立派な方だ。八上比売と一緒にになれるのは、きっとあなたの筈です」これが、のちの世で言う「稲羽の素兔(いなばのしろうさぎ)」で、兔神とも言われてもいる。気多の岬は、現在の鳥取市の北西部にある白兔海岸あたりだと言われている。

### <2> 大国主神の危機

兄弟一行は稲羽に着くと、八上比売に、妻になるようにと申し入れた。八上比売の答えはこうだった。「私は、皆さんの所へ行くのは嫌です。大穴牟遲神のところへ嫁に行きます」兄弟は怒り、大穴牟遲を殺してしまおうと謀をした。一行が伯伎國(ほうきのくに:伯耆つまり現在の鳥取県西部)の手間山(てまのやま)に差し掛かった時、兄弟は大穴牟遲にこう言った。「この山には赤い猪がいる。我々が山の上の方から追い落とすから、下で受け止めろ。失敗したらお前を殺すぞ」。そして、兄弟は猪に似た形をした石を火で真っ赤になるほどに焼いて、山頂から落とした。大穴牟遲は約束通り、この石を受け止めたのだが、火傷をして死んでしまった。大穴牟遲の母親である刺國若比売(さしくにわかひめ)は大変悲しんで、高天原に上って行って、万物の生成を司る天神(あまつかみ)である神産巢日神(かみむすびのかみ)に命乞いをした。

訴えを聞いた神産巢日神は、赤貝である●きさ貝比売(きさがいひめ)と蛤である●蛤貝比売(うむぎひめ)に、大穴牟遲を生き返らせよと命じた。

きさ貝比売が貝殻を削って粉を集めて、蛤貝比売が水で溶かして大穴牟遲の体に塗りつけた。

すると、死んだはずの大穴牟遲は、元通りの見目麗しい姿に戻ることができた。

暗殺作戦に失敗した兄弟は、次の作戦に取り組んだ。

深い山に入り、巨木を倒して割れ目に楔を打ち、大穴牟遲がそこに入ったところで楔を抜いた。

大穴牟遲の体は巨木の割れ目に挟まれてしまった。

母である刺國若比売は、息子の姿を探し求めて、巨木を割いて息子を救出し、こう言った。

「お前は兄弟の神に憎まれているので、この國にいてもいずれは殺されてしまうだろう。」

木の國(のちの紀伊)の植木の神である●大家毘古神(おおやびこのかみ)のところへ逃がした。

後を追いかけた兄弟は矢を放ち猛攻を続けたが、大きな木の陰に身を隠して難を逃れた。

閑話休題というところだが……、この事件の舞台となった手間山(てまのやま)は、現在の地図で確認すると鳥取県西伯郡にある手間要害山(海拔 329m)だと言い伝えられている。山麓には、蛤貝比売が貝の粉末を溶いた「清水井」という湧水が出ている。

度重なる苦難に見舞われている息子を不憫に思った母親は、こう進言した。

「お前はこの出雲國にいても危ないことばかりだ。お前の祖父の須佐之男(すさのおのみこと)は今黄泉國である根堅洲國(ねのかたすくに)にいる。尋ねて行ってみなさい。きっと何か良い知恵を授けてくれるに違いない」

かくして、大穴牟遲つまり大国主神は、父がいる根堅洲國に向かって旅立った。

### <3> 大国主神の次なる旅

根堅洲國に到着した大国主神は、須佐之男が住む宮殿を訪れた。

そこへ現れたのは須佐之男の娘である●須勢理比売(すせりひめ)だった。二人はそこで互いに一目ぼれしてしまい、夫婦の契りを交わした。

須勢理比売は父に「この上なく麗しき人が訪ねてきました」と取り次いだ。

須佐之男は大国主を見るや「これは、葦原色許男(あしはらしこを:\*註)という神だ」と言った。

\*註:葦原色許男神(しはらしこをのかみ)は、大国主神の別名のひとつ

宮殿の中へと招き入れたのだが、この葦原色許男を快く思わず、蛇が棲んでいる室の中に泊めた。

須勢理比売は、夫である葦原色許男を窮地から救うために、蛇を払いのける呪術に使う「ひれ」を渡して「蛇が近づいたら、このひれを三回振りなさい。」と言った。呪術の効果があって、無事切り抜けることができて、翌朝は平気な顔で室から出てきた。

翌晩は、呉公(おかで)と蜂が棲んでいる室の中に入れられた。しかし須勢理比売は、呉公(おかで)と蜂を払いのける呪術に使う「ひれ」を渡して、その使い方を教えた。翌朝も無事室から出てきた。

次に須佐之男は、果てしなく広い草原に向かって鎬矢を打ち、矢を拾ってくるようにと命じた。

葦原色許男が草原の中に入って行くのを見るや、草原の周囲にぐるりと火をつけた。

燃え盛る草原の中で進路を失ってしまい、万事休すと思ったところへ一匹の鼠が現れた。

鼠の助言に従って、草原の地下の洞穴に入って火勢をかわして助かった。そこへ鼠が鎬矢を口にくわえて持ってきた。そしてその後から、この鼠の子ども達が羽の方を加えて運んできて、葦原色許男に手渡した。妻の須勢理比売は、もうこれでは助かるまいと思って、泣きながらそこへやってきた。

葦原色許男は、約束通り須佐之男に鎬矢を差し出した。

次に須佐之男は、葦原色許男を宮殿の中に連れて入り、頭に巢食った虱を取ることを命じた。頭の中

は虱どころか、呉公(むかで)の巢のような状態だった。

妻の須勢理比売は、椋木の実と赤土(はに)を葦原色許男に渡した。木の実を噛んで赤土を混ぜて唾にして吐き出した。これを見た須佐之男は、呉公(むかで)を噛んで吐き捨てているものと勘違いして、いつの間にかうとうと眠ってしまった。

葦原色許男は、この機を逃さず、須佐之男の髪を毛を幾筋にも分けて、垂木に縛り付けてしまい、部屋を出て、500人力でも動かさないと思えるほどの大岩を運んできて、部屋の入り口に据えた。そして、須勢理比売を背負って、須佐之男の持物である生太刀生弓矢(いくたちいくゆみや)と、神意を聞くための天詔琴(あめののりこと)という琴を持って逃げ出した。

ところが、慌てたはずみにその琴が樹に触れてしまったので、台地が地震のように揺れ動き、眠っていた須佐之男に気づかれてしまった。いくつもの垂木に髪を縛り付けられているので、それをひとつひとつ解いているうちに、二人は遠くへ逃れることができた。須佐之男は大急ぎで二人を追いかけたが、国境の黄泉比良坂(よみつひらさか)まで来たところで、走り去る葦原色許男またの名を大穴牟遲神に向かって、こう叫んだ。

「お前は、生太刀生弓矢を使って、腹違いの兄弟どもを行く手の山の坂に追い詰め、河の瀬に追い払え。お前は大国主神と名乗り、また●宇都志國玉神(うつしくにたまのかみ)と名乗って、出雲の国を治めよ。私の娘の須勢理比売を正妻として、宇迦能山(うかのやま)の山裾に、高天原に届くほどに屋根の高い立派な宮殿を建てて、いつまでも暮らすが良い」

そして、80人の腹違いの兄弟をことごとく打ち破り、国を治める仕事が始まった。

#### <4> 三角関係の前と後

ここで冒頭の話の舞台に戻ると、大国主神には、稲羽國の八上比売(やかみひめ)というパートナーができた筈なのだが、ここでまた須勢理比売というパートナーが出現して三角関係になった。

稲羽から出雲へ連れてこられた八上比売と、約束通り一夜を共にしたのだが、須勢理比売の嫉妬心が強く、恐怖を感じて、生まれた御子を木の俣に挟んでおいて、元の稲羽國へ帰ってしまった。

この生まれた御子の名を●木俣神(きのまたのかみ)と言い、別名を清らかな泉を称えた●御井神(みいのかみ)とも言う。

複雑な男女関係に、読み手としてはやや混乱をきたして来たところだが、次章でさらに次の女が登場するとは思ってしなかつた。

以上